

初めて殺しをしたのは、いつの時だったか。

いつかは忘れなければ、相手の顔や、どうやって殺したかは、良く覚えている。

忘れられる筈が無い。

別に、したくてした訳では無い。

孤児院を飛び出してしまっただけの子供に出来る仕事なんて、そうありはしない。

結果として、それが一番適性があった、それだけだ。

初めてがいつだったかを忘れたように、何人殺したのかも、とうに忘れていた。

一々勘定するのが面倒になったからだ。

ただ、同い年の男が、デートをした回数よりは、ずっと多いだろうと思う。

いわゆる殺し屋として生計を立てているレネは、ぼっと見、年端のいかない少年、いや、事実年端のいかない少年であった。

普通であれば、学校に通い、級友と他愛の無い会話をし、

両親に小言を言われ続けるべき年頃の少年であった。

しかしながら、彼の経歴は、その歳にそぐわぬほど、血に塗れたものであった。

なぜそうなったか。切っ掛けなど、つまらないものだ。

行く当ての無い子供を、街の小さな（ファミリー）が拾い、その目的のままに遇した、それだけだ。

そして、身体を売るよりも、人を殺める方に才能を発揮してしまった。

ただ、それだけだった。

暗殺者として子供である事は、絶対的な有利では無いが、成人のそれに真似の出来ない事を可能ともしていた。

向こうから近付いて来るものが、大人と子供では、どちらが警戒を厳とするか。

ましてや、その子供がみずばらしい身なりをしていればどうか。

物乞いやスリとは思えず、殺し屋などとは思いません。狙われているのは財布では無く、自身の命などとは思いません。どうだろう。

だから、レネの「仕事」は上手いっていい。

使う道具は、主に銃。暗殺用に、小さく、そして極力音が出ないようにしてある特殊仕様だ。

こいつを、至近から、時にはぶつかりながら撃ち込む。

油断をしていたり、不意を突かれた人間を殺すのは、簡単だ。

後は、それこそ殺しを実行した事すら勘付かれる前に、その場を逃げ去れば良い。

小柄な子供の身体は、人混みに紛れてしまえば、まず見付けられなくなる。

筈だった。

流石に毎度毎度いつまでも、そう上手くいくものじゃ無い。

同じ事ばかりを繰り返していれば、そのツケを払わされるかのように、しくじる時が来る。

今日が、それだった。

幸い、捕まった訳でも、しつかりと顔を覚えられた訳でも無いが、しばらくの間、ほとぼりを冷まさなければ、迂闊な身動きが出来ない状況になっていた。

ドジったとも思うし、油断できない状況になったとも思うが、どうにもならない訳でも無いと感じていた。

少しの間、「果」に戻る事も無く身を隠していれば、最悪の事態にはならないだろうとの感触があった。

レネは、取り敢えずの隠れ場所に選んでいた路地裏の、ゴミ箱の間にうずくまった。

上には屋根もあるから、多少雨が降っても問題ない上、こんな所に薄汚い子供が座り込んでいても、お節介な奴以外は、見向きもしないどころか、見て見ぬ振りをしてくれる。

ありがたい話だ。

レネは少しでも疲れを癒やそうと、目を閉じる。眠りはしない。そんな無防備な姿を晒すわけにはいかない。

案の定だ。何者かが近付いて来る気配がする。

↓↓↓つづきは

《おねシヨタ》アンソロジー『Overtime City』で！